

クラブで得た事

藤原芳子

クラブに入った動機といえば、人數が足りないと言う事からである。最初はなれぬ重労働に流され、本当にやめようと思ふ。その瞬間は幾度もあつた。でも皆の友情に支えられ、その危機を乗り越え今日にまで及んできた。その間に於ける私の経験は本当に貴重なもので、高校生としての経験から人間問題まで若えるようになった。そしてその経験を述べる事にしよう。

誰しもが感じる試合の一印象として、自分の力の限界というものを目の前で示された。自分がどんなに未熟で人並に及ばない事か、そうしてモット練習しなければならない事である。あやふやな気持ちでいい事ではだめだ、もつとしっかりとした決意である。

又、今までの試合に於ては、チームには信頼しあうといふ事が最も大切だという事だ。信頼しあうと二つにチームが一つと成る。チームは、今まで大きなつながりとなる私が成る。

卒業にあたって

佐藤順子

中学時代、いろんなクラブに入り少しづつ伸びてきました。それが卒業してしまうと何なくては……。その日から私はハンドボールマンになつたのである。

つましくては、今ままでの試合に於ては、チームには運動クラブでは卓球、文化クラブではコララス部が深く印象に残つてゐる位です。クラブに熱中しなかつたから勉強を一生懸命した。しかし、何とかなつたかと思われますか、そんな覚えもく一瞬のうちに中学時代をすこししてしまいました。

丁度ジヤニアユートができかかってさうの日に、私はカラスで足を切つた。その瞬間の皆の態度は、私の方が氣の毒にと思うほどやつてくれた。その時ほどクラブに入つていろられしさというものを痛快に感じた事はない。それによつて友情とはなんものだなあと知つた。

以上は、私のクラブ生活三年に於て得た私にとっての最大の経験である。こういうことにもハンドボールクラブ内の歴史の中の底辺を流れている一つとして記す。

私は姉の念願通り高津高校に入学できました。でも姉には、私の背広姿を見せる事が出来ませんでした。幼い頃の高津高校の印象に残って、自由至到ツトーとするすれば強しかすることのなかつて私ができますが、一年の中頃からはハニドボールが私の日課とななり、明けても暮れてもハニドボールをやって来てました。学校の帰りが遅いと何度も止められましたけれど、運動でモして丈夫にならなければと言つたのがかでしたので、思う存分クラブをやって来ました。技術的には余り上達していませんが、そんな事よりも、もつと大事なものをクラブから身につけて来ましたけれど、運動でモして丈夫になりました。



やれる機会があれば、もつと練習して、心身共に洗練されにものにしたいと思つてあります。そして立派な一女性へ……社会に出てから、誰かに高校時代の事を聞かれたら、私は必ず最初にハニドボール部の話をするでしょ。大いに誇りを持つて、その時のためにとつては裏ですが、三思り出を續けてみようと思ひます。

入部して以来、キーハーがやつと板について来て頃、四月から五月にかけてのプロツク大会兼府民大会予選に出席した時の事です。(ミニバ)は、二年生に石崎さん、安村さん、三砂さん、林さん、田、小早川、佐々見、佐藤の六人、四人、一年生に坂口、大石、久保田、小早川、佐々見、佐藤の六人、計十人という申し分のないメンバーをフルに活躍させて、宿敵寝屋川には及ばませんでしたが、春日丘と大阪女子商業に勝ち、府民大会の本場権を得ました。府民大会では惜しくも大谷高校にやられましたが、出場できただけで大変うれしかった。それも、本校アランドで行われたのですから事更でです。その日の後で寝屋川と練習試合をして3-1で勝つ事も忘れてはならないでしよう。

春が過ぎ夏が訪れると合宿の事を思ひ出します。二年の夏の合宿は春と置つて頭の

痛い合宿でした。人数は八人(次12) 小早川
久保田、佐々見、京谷、佐藤。のなが
にけれどもがく方りの人で一致団結して規
律めを合宿生活一同間を過せに二とは、大
変有意義な事でした。人数が少なくて練習
にこだえ苦ししかったが、休憩時間に家庭科
室の横でぶつ倒れて涼風をしめん味わ
たのも忘れられません。苦しいばかりには
なく、第一日目、前の宿直室で小久保先生
や衛藤先生、先代も中江さんを交えて難波
それに電話の事も今で懊も思い出すと小
き出します。二日目も、二月の教訓で
したが、前の練習にきめ細かく教はれて男
子の失望を交えてトランゴをしたり、恋愛
いをしたりして充分暮しかった。キーパー
としての思ひ出はれ此位にして、フオワリ
ドに変ってから的事を書こうと思いますが、
が、三年になつてやり始めて試合経験も少
いし、アーヴィード一年生が、偉そうに走
きくのも何でもないのです。
これからハニードボーラーの隆盛を祈り、
高津ハンドボール部の活躍を期待しつつ

私のクラブ生活

佐々見淑子

ががハニドボール部に入部したのは、一年生の二学期も終りに近い十二月だった。そく噴は一学期や、二学期の始めとは違って、何か運動クラブに入つて、准卒に昇るみたいといふ強い欲望も、幾分薄れ、それ迄はどちらこちらへグラブを転々と/orて来ていただけに、慎重に、今度こそ蓄着けるクラブに入りたいといふ願いも強かつた。当時ハニドボール部は部員が他の女子運動クラブに比して少なく又、一心校内大会といふ競技を通して、勧誘された私であつた為か待遇も良かっただし、スハニドボールというスポーツ自体の持つスケールの大ささに魅せられて、練習は厳しかつだけれど、さ程苦にはならなかつた。それでも、入つて日の浅い俺は、熱心が三年生、大人達を見てつけ、よくまあ、鈍^{コモ}せん人とガボラ^{ガボラ}ンキ、練習しよるがみ、よつぱり、暇^{ヤマ}やギギニナ^{ギギニナ}、と思つた程、私にもつて、クラブ活動^ア活動^ア、意味を持たなかつたりする。今から思うと、クラブというものを、適当に樂^ハむ^ハるのもの、と理解していただけが、小造りのクラブ活動に対する根本的な思い違いだ。